

# アールトネンの《交響曲第二番「ヒロシマ」》

— 冷戦期の東欧上演をめぐる —

能登原 由美

はじめに

「ヒロシマ」<sup>①</sup>をテーマに創作された音楽作品の数は、一九四五年の原爆投下直後から一九九五年までの半世紀間だけでも五〇〇曲以上にのぼる<sup>②</sup>。投下から六十九年を迎える二〇一四年現在では、その数はさらに増えることは間違いない。

このように、作品数や半世紀以上にわたる音楽創作の歴史を鑑みれば、「ヒロシマ」という都市ほど創作主題の対象となった都市は他に例を見ないだろう。しかしながら、「ヒロシマ」の音楽表現について論じられることはこれまでほとんどなかった。そもそも、「ヒロシマ」に関連して創作された音楽作品については、戦後しばらくの間は収集や研究の対象となることはなく、散逸の憂き目に遭っていた。その重要性をいち早く認識し、収集、研究対象として取り上げたのが、社会学者で哲学者でもある故芝田進午である。一九七六

年の広島大学赴任以来、芝田は「原爆音楽」と称して「ヒロシマ・ナガサキ」や「反核」に関わる作品を収集するとともに、作品の上演機会を積極的に設けて「原爆音楽」の意義を提唱した（芝田1982）。けれども、芝田による「原爆音楽」の評価はあくまで倫理的、政治的側面に基づいており、美的側面も踏まえた作品の体系化や理論化までには至らなかったといえる。その後、被爆五〇周年を機に芝田の収集事業を受け継いだ広島市民団体「ヒロシマと音楽」委員会が「ヒロシマ」や「反核」をテーマとした音楽作品群を体系化した（「ヒロシマと音楽」委員会2006）、作品ごとの詳細な分析や考察は行われておらず、なお理論化には至っていない<sup>③</sup>。

そこで筆者は、「ヒロシマ」をテーマとする音楽作品史において重要な作品を取り上げ、楽曲内容の分析とともに、創作・受容状況の調査を中心とした事例研究をもとに、理論化を進めることとした。

本稿で論じるフィンランドの作曲家、エルツキ・アールトネン

(Erkki Aaltonen, 1910-90) の《交響曲第二番「ヒロシマ」》(以後、《ヒロシマ・シンフォニー》と略称) は、こうした「ヒロシマ」をテーマとした音楽作品のうち、現存する器楽曲として、また外国の作曲家による作品として最初のものとして位置づけられる。被爆から僅か四年後の一九四九年に作曲されたのち、同年ヘルシンキで世界初演される一方、被爆から十年目にあたる一九五五年には、広島市において五千人の市民を前に演奏されている。多くの被爆者を前に「ヒロシマ」を表現した作品がどのように受容されたのか。創作とともに受容状況においても、「ヒロシマ」の音楽の作品研究に重要な示唆を与えるものと思われる。

一方、世界初演の翌年から一九六〇年までの間に、《ヒロシマ・シンフォニー》はヨーロッパの社会主義政権下の都市において上演されたとみられている。米ソの対立を主軸とする東西冷戦の激化に伴い、一九五〇年代に入るとヨーロッパにおける平和運動、反核運動が政治イデオロギーと密接に絡み合いながら活発化していったことを考えると、五〇年代に「東欧」で行われた本作の上演背景に政治的な思惑があったことは十分に推測できる。

こうしたことから、筆者は昨年、半年間にわたってこの東欧における上演の事実確認と詳細に関する調査をフィンランドと各上演都市において行った。本稿は、この一連の調査により明らかとなった、《ヒロシマ・シンフォニー》の東欧上演状況を報告するものである。

## 一・アールトネンと《ヒロシマ・シンフォニー》の概観

アールトネンと《ヒロシマ・シンフォニー》について、筆者はすでに、その経歴や創作活動、また本作の背景や意図、音楽的特質、批評など、幾度かにわたり論じている(能登原 2009, Notohara 2010・2012)。よって、ここでは重複を避けるために、本調査で新たに発見、確認された点のほかは、本稿の展開に必要なと思われる点を示すにとどめたい。

### 一・フィンランド音楽史における位置づけと資料状況

アールトネンは、第二次大戦後のフィンランドで、作曲家、指揮者、ヴァイオラ奏者として活躍した。創作活動については、管弦楽作品の創作が多く、古典的な形式と調性音楽を主軸とした作風で、時には十二音技法などの前衛的な手法を取り入れるものの、当時のフィンランド音楽界においてはむしろ保守的な流派に属する作曲家であったといえる。また、歌曲や劇付随音楽などを除けば標題をもつ作品は少なく、アールトネンの創作において、《ヒロシマ・シンフォニー》は異色の存在であったといえよう。

一方、アールトネンは死後二〇年以上を経た現在、母国フィンランドにおいてさえ忘れられつつある。その生涯や音楽についての情報は極めて少なく、作品の音源や楽譜の入手も難しい。その上演に

についても同様で、彼の代表作と言われるこの《ヒロシマ・シンフォニー》<sup>7</sup>さえ、一九九八年にフィンランドにおいて四十四年ぶりに演奏されたのが最後で、それ以外に作品が人々の耳に触れることは皆無と行って良い。彼に関する記述は、フィンランド音楽史を著した幾つかの文献の中で僅かに触れられている程度で、彼に関する研究もこれまでのところ行われていない。

このように、当初は《ヒロシマ・シンフォニー》どころかアールトネンについての調査さえ困難を極めたが、筆者は現在までに、その資料状況を左記のように確認した。

(一) 遺品資料 (Coll. 728)

アールトネンの死後、彼に関するほぼ全ての資料は遺族によってフィンランド国立図書館に提供され、同館において現在はColl. 728として保管されている。その内訳は、自筆譜や創作スケッチなど創作に関するもののほか、演奏者、教育者、活動家などとして関わった各機関に関連する書類、アールトネン自身に関する資料（成績証明書、各種会員証、証明書など）、受領した書簡（ハガキ、手紙、カード、招待状、案内状など）、投函した書簡の下書きや書き損じ（タイプ打ち、手書きの双方を含む）、各種メモ帳（スケジュール帳、日記帳、備忘録）、受領した名刺、新聞記事切り抜き、雑誌、コンサートのプログラム、写真など、残された遺品のほぼ全てが含まれる。

本稿では、これらの資料の個々については大きく掘り下げないことから、Coll. 728という総称のもとで扱う。

(二) アールトネン自身による編纂資料 (HY資料)

《ヒロシマ・シンフォニー》をはじめとする彼の代表作については、その上演と作品批評に関する新聞・雑誌記事や公演プログラム、合わせて約二百点の資料が一冊の非公刊の記録集としてアールトネン自身によって生前にまとめられていることが明らかとなった。「作曲家エルッキ・アールトネンの三〇年余りの活動からの資料集」とタイプで打たれた冊子は、A4版で計一五頁からなり、巻末には創作活動の歩みや履歴、主要作品リストなども掲載されている。一九八一年にまとめられた後、ヘルシンキ大学で所蔵されていた。アールトネンの死後、その遺品が遺族によってフィンランド国立図書館に提供されColl. 728として管理下におかれると、このアールトネン編纂の資料もColl. 728の下位区分となる728.35の番号でこの図書館の管理下におかれることになった。

このように、作曲者自らが生前にまとめた創作活動の記録集は、本人と個々の作品との関係や、作者自身の自作に対する評価、反省などを知る上で非常に重要である。そのうち《ヒロシマ・シンフォニー》に関する部分は四十九頁にわたり、全体の半分近くを占める。《ヒロシマ・シンフォニー》を彼の代表作とみなす外部からの評価

だけではなく、アールトネン自身、この作品に対する思い入れがひと際強かったことが窺える。よって、この資料については本研究において重要な役割を担うと思われることから、最初に収められたヘルシンキ大学 (Helsingin Yliopisto) の名前を取り、HY資料と称して扱うこととする。また引用時には、頁番号とともに表記する。

### (三) スコア

《ヒロシマ・シンフォニー》のスコアについては、自筆スコアのファクシミリ版がフィンランド音楽情報センターより現在も発行されている (Aaltonen 1996)。

### (四) 音源

《ヒロシマ・シンフォニー》ほか主要な管弦楽作品の録音資料は遺族によって保管されており、研究のための使用という条件下で筆者も提供を受けた。そのうち、《ヒロシマ・シンフォニー》については、一九四九年のヘルシンキ初演と一九五四年のヘルシンキ再演時のもの<sup>10)</sup>、さらに、一九九八年のタンペレ上演時<sup>11)</sup>の音源がある。また、この度の調査により別の音源も残されていたことが判明したが、それについては後述する。

### 一・二・《ヒロシマ・シンフォニー》の楽曲構成

本作の構成や意図についてアールトネンは、公演プログラムや新聞記事、回顧録などにおいて何度も述べており、その内容については文書間で目立った相違はない。よって、ここでは広島公演時のプログラムに掲載された説明を引用したい (アールトネン 1995)。なお、このプログラムについては、ヘルシンキ再演時のプログラムに掲載された解説<sup>12)</sup>とみられることを、筆者は確認している。

全体は七つの部分で構成される。スコアには各部の冒頭にイタリア語で、序奏、アレグロ、スケルツォ、フーガ、クライマックス、墓碑銘、フィナーレの表示がある。アールトネンによれば、全体は自由なソナタ形式と捉えられ、アレグロが提示部、スケルツォとフーガが展開部、クライマックスが再現部、墓碑銘がコーダに当たるという。ただし、クライマックスで再現されるテーマは序奏で用いられたもので、このテーマが変形を伴いながら全体を通じて何度も現れる。半音反復や十二音音楽風のモチーフに基づく展開部では調性を逸脱した書法が中心となるが、序奏でのハ短調による始まりと、終始ハ長調で奏されるフィナーレにより、全体的には調性音楽の枠組みに捉えられる作品となっている。

他方、アールトネンは、『火の爆風』を描写する<sup>13)</sup>など、本作が原爆投下の描写であることを示唆する説明も加えている。こうしたことから、『ヒロシマ・シンフォニー』は原爆投下を描写した「標

題音楽」とみなされ、「交響曲というよりは交響的幻想曲」(Suomen Sosialidemokratia 6/11/1949)と捉えられることもあった。

## 二・《ヒロシマ・シンフォニー》のヨーロッパ上演に関する調査報告

先に述べたように、HY資料には、《ヒロシマ・シンフォニー》に関する資料が多数含まれている。よって、そのヨーロッパ上演についても、この資料に所収された新聞記事やコンサートのプログラム、また作曲家自身によるメモなどをもとに上演状況を追跡できるものと考えた。しかしながら、資料を精査すると、メモ書き程度のものしか残されていない公演や、アールトネン自身による回顧録の文書間に齟齬がみられる公演があることがわかった。よって、これらの公演について、実際に演奏したと記録されるオーケストラ団体やコンサート主催団体、資料を保管しているとみられる図書館、音楽情報センターなどに連絡を取り、その詳細を確認するとともに、資料確認のために現地にて直接調査も行った。

以下、その調査の詳細について、上演の年代順に示そう。

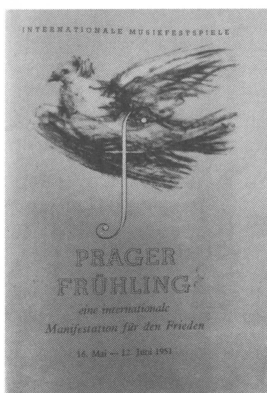
### 二一・プラハ

#### (一) HY資料およびColl. 728における記録内容

HY資料には、アールトネン自身のタイプとみられる「一九五〇年、

ヴァーツラフ・ノイマンがプラハ・ラジオにて《ヒロシマ・シンフォニー》を振った」との記載がある(HY22)。しかしながら、プラハでの上演自体を裏付ける資料はなく、その詳細は不明であった。

一方、Coll. 728の調査で、一九五二年五月十六日から六月十二日まで開催された「プラハの春音楽祭」<sup>13</sup>のドイツ語版、英語版パンフ



(写真1) 1951年開催の「プラハの春音楽祭」パンフレット(ドイツ語版)(チェコ国立図書館所蔵)



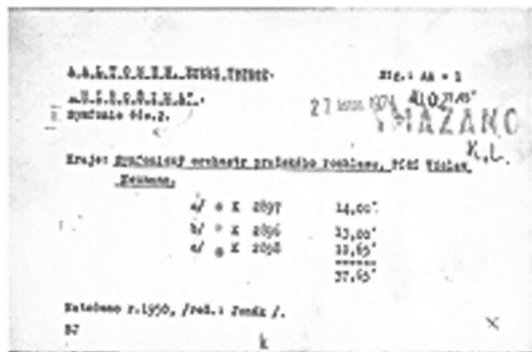
(写真2) 1951年開催の「プラハの春音楽祭」パンフレット(ドイツ語版)最終頁に掲載されたアールトネンの写真(チェコ国立図書館所蔵)

レット、当音楽祭の一環とみられるコンサートのプログラムが多数見つかった。さらに、その「プラハの春音楽祭」のパンフレットには、最終頁に「フィンランドの進歩的な作曲家E・アールトネン、プラハ放送交響楽団によって演奏された『ヒロシマ』シンフォニーの作者」との見出しでアールトネンの写真が掲載されており、一九五一年の同音楽祭で上演された可能性が浮上した(写真1、2は、チェコ国立図書館所蔵のドイツ語版パンフレット)。

(二) 現地調査による結果

以上の記録をもとに、「プラハの春音楽祭」事務局、チェコ国立図書館、チェコ音楽情報センターに問い合わせた結果、「プラハの春音楽祭」ではいずれの年においても本作が上演された記録がないことが判明した。

一方、筆者の友人でチェコ・テレビ放送に



(写真3) 《ヒロシマ・シンフォニー》の録音データ・カード (チェコ・ラジオ放送所蔵)

勤めるチェコ人音楽学者の協力により、チェコ・ラジオ放送へ問い合わせた結果、一九五〇年にチェコスロヴァキア・ラジオ放送のスタジオで、ヴァーツラフ・ノイマン指揮、プラハ放送交響楽団による演奏が録音されていたことを示すカードが見つかった。ただし、同カードには、「一九七四年十一月二十七日に削除」との印が押しであり、すでに音源が失われていることも同時に判明した(写真3)。なお、同カードには月日の記載がないため、録音月日については不明である。

以上より、プラハにおける演奏については、一九五〇年に、チェコスロヴァキア・ラジオ放送局スタジオにて、収録のための演奏が行われていた事実が明らかとなった。ただし、録音日に加え、放送日時やその詳細については依然不明であり、さらなる調査を要する。

二二・ワルシャワ

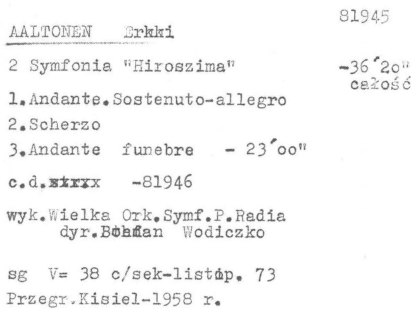
(一) HY資料およびColl. 7282における記録内容

HY資料には、ポーランドを代表する指揮者の一人、グジェゴジ・フィッテルベルク (Grzegorz Fitelberg 1879-1953) の写真とともに、その隣の余白にアールトネン自身のタイプとみられる、「一九五四年、ワルシャワ・ラジオでG・フィッテルベルクが第二交響曲を演奏」の一文があった(HY 22)。しかしながら、フィッテルベルクは五十三年に死去している上、アールトネン生誕五〇年を記念してそ

の活動を回顧した新聞記事 (Tusi Páivä 31/3/1960) においては、「一九五五年にワルシャワとクラクフで上演」(傍点能登原、HY 50)とあり、HY資料の記録に誤りのあることが明らかとなった。なお、先のプラハ上演同様、ワルシャワ上演についても、HY資料およびColl. 78の中にこれを立証するその他の資料は含まれていなかった。

### (二) 現地調査による結果

ポーランド国立放送交響楽団はフィッテルベルクが設立に関わった団体でもあることから、同団体のアーカイブ担当者にお問い合わせを行った。<sup>15</sup> その結果、指揮者はフィッテルベルクではなく、ポーダン・ウディチコ (Bohdan Wodiczko 1911-85) により一九五二年に演奏されたこと、その演奏の録音がポーランド・ラジオ放送に保管されているこ



(写真4) 《ヒロシマ・シンフォニー》の録音データ・カード (ポーランド・ラジオ放送所蔵)

とを示すカードが見つかった (写真4)。

続いて、ポーランド・ラジオ放送に録音資料が現存することを確認し、同放送局で当該録音を聞いた。収録の日時や状況についてはカードの記録に残されていないが、聴衆の拍手などが全く入っていないことから、ライブ録音ではなくスタジオ収録と思われる。一方、楽団や局の資料にはリストへの記入日として「一九五二年九月二十五日」の日付があるとい<sup>16</sup>、これより前に録音されたことは間違いないとみられる。

### (三) HY資料におけるウディチコの存在

ところで奇妙なことに、指揮者ウディチコについては、筆者の調査した限り、HY資料やColl. 78の中にアールトネンとの関わりを示す資料は全く出てこない。後述するように、ウディチコはその後クラクフで行われた《ヒロシマ・シンフォニー》上演時の音楽監督でもあった。HY資料に所収されたこのクラクフ公演のプログラムの上隅には、「音楽監督」として名前が印刷されているが (HY 34)、それ以外に彼の名前は見当たらない。そもそも、このワルシャワでの演奏についてアールトネンは、指揮者の名をフィッテルベルクと記していた。何故このような齟齬が生じたのか。

この疑問を解くとみられる記述は、アールトネン自身による回顧録からみつけた。この回顧録はHY資料の巻末に掲載されたタイプ

原稿 (HY 95-103) で、執筆の目的や時期などを特定するものはないが、その内容をみると、一九六六年に刊行された *Suomen Sivehäjia* (『フィンランドの作曲家たち』) の中でアールトネン自身によって書かれた回顧録に重複する部分が多いことから、この回顧録の元原稿とみられる。<sup>17)</sup>

その内容とは、『ヒロシマ・シンフォニー』に関してアールトネンとフィッテルベルクが交わしたやり取りに関するものである。アールトネンも参加した一九五一年の「ブラハの春音楽祭」にはフィッテルベルクも招待されており、このやり取りは、この音楽祭で出会った二人の間で生じたものとみられる。

アールトネンの記述 (HY 100) によれば、『ヒロシマ・シンフォニー』に興味を示したフィッテルベルクがスコアを見たいと希望したため、ある晩彼にスコアを貸した。翌日、フィッテルベルクはアールトネンに「スコアをポーランドの私の元へ送ってください、そこで演奏しましょう」と言い、アールトネンによれば、「それは後に実現した」。筆者が注目する二人のやり取りはここで終了するが、すでに明らかのように、ここにウディチコの名前は出て来ない。

以上の記述から推測するに、アールトネンはポーランド・ラジオ放送における演奏について、自らが楽譜を送った相手であるフィッテルベルクが指揮したものと思い込んでいたとみられる。しかしながら、実際に指揮したのは、一九五二年から五三年にかけて当楽団

の第二指揮者の位置にあったウディチコであった。<sup>18)</sup> その経緯として、楽団設立者でもあり、当時は音楽監督であったフィッテルベルクが、『ヒロシマ・シンフォニー』の指揮者としてウディチコに白羽の矢を立てた可能性は大いにある。あるいは、翌年の六月には亡くなってしまうフィッテルベルクの容態が、録音時にはすでに芳しくなかった可能性も考えられるだろう。

### 二一三. ブカレスト

#### (一) HY資料およびColl. 728における記録内容

ブカレスト公演については、HY資料にコンサートのプログラムや新聞記事が所収されるときも (HY 2332) / Coll. 728には公演の写真、ポスター (写真5) など多くの関連資料が保存されていた。



(写真5) ブカレスト公演のポスター (フィンランド国立図書館所蔵)

公演は一九五三年六月二十日、二十一日の二日にわたり、ルーマニアを代表するオーケストラであるルーマニア・フィルハーモニー



ク・ソサエティ（現ジョルジュ・エネスコ・フィルハーモニー）の定期公演によるものであった。同公演での指揮者は、すでにフィンランドで指揮者としても活躍していたアールトネン自身であった。ピアノ協奏曲のソリストには、ルーマニアの女流ピアニスト、マгда・ニコラウ (Magda Nicolau 生没年不明) が起用されている。

なお、Coll. 728には、コンサートが大成功に終わったことを伝える複数の新聞記事（現地新聞およびフィンランドの新聞）とともに、コンサートの写真も複数収められている。さらに、一九五八年に始まり現在なおも続くルーマニアの国際的音楽行事、ジョルジュ・エネスコ国際音楽コンクールの第一回大会への招待状など、公演後もルーマニア音楽界とアールトネンの間に良好な関係があったことを示す資料が幾つか含まれている。

## 二一四. クラクフ

### (一) 正資料およびColl. 728における記録内容

クラクフ公演についても、HY資料にコンサートのプログラムや現地新聞記事が所収されるとともに (HY 33-35) / Coll. 728には公演時の写真も保管されていた。これらの記録によると、公演はクラクフ・フィルハーモニー管弦楽団の定期公演の一環で、一九五五年五月二十七、二十八日の二日にわたり、アールトネン自身による指揮であった。曲目は、《ヒロシマ・シンフォニー》のほか、シベリウス、

ラヴェル、それにアールトネンの《オーケストラのための民俗音楽》が取り上げられている。ラヴェルのピアノ協奏曲のソリストには、一九四九年開催のシヨパン・コンクールで第二位を受賞した、ポーランドの新進女流ピアニスト、バルバラ・ヘッセ・ブコフスカ (Barbara Hesse-Bukowska, 1930-) が起用されている。

一方、先のワルシャワでの演奏録音同様、このクラクフ公演時の録音もポーランド・ラジオ放送に保管されていた。やはり録音日時の記録はないが、リストへの記入日として「一九五五年六月七日、八日」の日付がある。演奏前後の拍手や客席の物音も録音されていることから、五月末に行われた演奏会時の録音とみられる。

### (二) ウディチコと「ヒロシマ」

今回の調査では、先述のワルシャワでの演奏の指揮者がウディチコ (写真6) であったことが判明したが、この事実は非常に興味深



(写真6) ボーダン・ウディチコ (1950年頃) (ポーランド国立放送交響楽団所蔵)

い。というのも、このクラクフ公演時のクラクフ・フィルハーモニーの音楽監督が、そのウデイチコであったのである。音楽監督は通常、選曲や演奏者の選抜などに大きな権限をもつことを考えれば、このクラクフでの《ヒロシマ・シンフォニー》の再演にもウデイチコの発言が大きく影響した可能性は十分に考えられる。しかも、今回は作曲家でもあるアールトネン自身が指揮者として招かれている。残念ながら、アールトネンとウデイチコの関係を示す資料が見つかっていない現段階では、その再演の背景について判断することはできないが、本作の受容を考える上で重要な事実である。<sup>19)</sup>

## 二一五. タリン<sup>20)</sup>

### (一) HY資料およびColl. 7283における記録内容

タリンでの公演については、HY資料にエストニア放送交響楽団(現エストニア国立交響楽団)の定期公演で演奏されたことを示すプログラム表紙のコピーが掲載されていた(HY 36)。それによると、公演は一九六〇年一月二十四日で、アールトネン自身の指揮によるものであった。さらに、本公演はアールトネンの作品のみを上演するという「作曲家の個展」の体裁を取っていた。《ヒロシマ・シンフォニー》のほかアールトネンの管弦楽作品三曲が演奏されている。タリンにおいては、この公演に先立つ一九五八年六月に、すでに合唱指揮者としても活躍していたアールトネンが、フィンランドの

自らの合唱団を率いてタリンで演奏を行ったことを示す記事が、HY資料に掲載されている(HY 44)。また、《ヒロシマ・シンフォニー》のタリン公演と同じ年の六月には、エストニアの国民的行事ともいえる「歌の祭典」において、アールトネンの指揮により同じ合唱団による演奏が行われている(HY 4546)。よって、《ヒロシマ・シンフォニー》の上演については、こうしたアールトネンの合唱指揮者としての活動を通して培われた、タリン音楽界とアールトネンとの良好な関係が背景にあったと推察できる。

以上、本調査で明らかになった《ヒロシマ・シンフォニー》の上演状況についてまとめると、次頁の(表)のようになる。ここでは、東欧上演のみならず、本作の一九五〇年代の上演状況全体を示せるよう、今回の調査対象には含まれていなかったヘルシンキ公演と日本公演についても掲載する。

### おわりに—今後の研究への示唆

以上、《ヒロシマ・シンフォニー》の東欧上演について、フィンランドに保管されているアールトネンの遺品資料の調査と、東欧での上演都市における調査を通じて明らかになった点についてみてきた。それによると、本作は、母国フィンランドで世界初演された翌年から様々な都市で上演されていたことがわかる。

(表) アールトネン《交響曲第二番「ヒロシマ」》上演状況 (1949-90)

作成：能登原由美

年月日	公演都市 (場所)	演奏者 <sup>1)</sup>	演奏曲目 (コンサートのみ、プログラム等記載順)	備考
1949/1/4	ヘルシンキ ヘルシンキ大学ホー ル	指揮：エルツキ・アールトネン 演奏：ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団	アールトネン：交響曲第1番 アールトネン：ピアノ協奏曲 アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」	プログラムは見つかっていないが、コンサート評が多数あり。
1950 (月日は 不明)	チェコ・ラジオ放送 局スタジオ	指揮：ウラハツラフ・ノイマン 演奏：プラハ放送交響楽団		かつて録音し、その後1974年11月27日に廃棄されたことを示すカ ードの発見 (チェコ・ラジオ放送所蔵)。
1952 (月日は 不明) <sup>2)</sup>	ポーランド・ラジオ 放送局スタジオ	指揮：ポーランド国立放送交響楽団 演奏：ポーランド国立放送交響楽団		録音音源の発見 (ポーランド・ラジオ放送所蔵)。
1953/6/20, 21	ワルサト アテネウム音楽堂	指揮：エルツキ・アールトネン 演奏：ルーマニア・フィルハーモニー・ソサ エティ	シベリウス：交響詩「フィンランディア」 リスト：ピアノ協奏曲第2番 ハイルムグレン：四季、4つの交響的絵画 アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」	「シンフォニー・コンサート」プログラム有り (フィンランド国立 図書館所蔵)。
1954/3/26	ヘルシンキ ヘルシンキ大学ホー ル	指揮：タウノ・ハニカイネン 演奏：ヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団	アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」 ワグネル：パルティータ「オコク」 シベリウス：ウァイオリン協奏曲	「シンフォニー・コンサート」22「プログラム有り (ヘルシンキ・ フィルハーモニー管弦楽団所蔵)。
1955/5/27, 28	クラクフ クラクフ・フィルハ ーモニー・ホール	指揮：エルツキ・アールトネン ピアノ：ハルバウ・ヘッセ＝ゾコフスカ 演奏：クラクフ・フィルハーモニー管弦楽団	アールトネン：オーケストラのための民俗音楽 シベリウス：組曲「美しい組曲」 ラヴェル：ピアノ協奏曲「長調」 アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」	「シンフォニー・コンサート」プログラム第50「プログラム有り (ク ラクフ・フィルハーモニー管弦楽団所蔵)。録音音源の発見 (ポーラ ンド・ラジオ放送所蔵)。
1955/8/15	広島 広島市公会堂	指揮：朝比奈隆 演奏：関西交響楽団	シューベルト：交響曲第8番「未完成」 シベリウス：交響詩「フィンランディア」 アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」	「終戦10周年記念特別演奏会」プログラム有り (大阪フィルハーモ ニー交響楽団および広島市公文書館所蔵)。 当夜、朝日放送およびラジオ東京から「ABC 百万人の音楽」にて放送 (8月5日に大阪、産経会館にて事前収録したもの)。また、8月21 日夜にはラジオ中国から広島地域で放送。
1955/8/31	京都 円山音楽堂	指揮：朝比奈隆 演奏：関西交響楽団	ドヴォルザーク：交響曲第9番「新世界より」 アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」 チャイコフスキー：舞踊組曲「くるみ割り人形」より	「第2回国連ユニヴァーサイト・コンサート」プログラム有り (国連京 都本部所蔵)。
1980/1/24	タリン エストニア・コンサ ート・ホール	指揮：エルツキ・アールトネン 演奏：エストニア放送交響楽団	アールトネン：交響曲第2番「ヒロシマ」 アールトネン：管弦楽のための組曲「ラウヘス」 アールトネン：パルティータ「ラッポニア」 アールトネン：交響曲第4番	「エルツキ・アールトネン作品コンサート」プログラム有り (エス トニア国立交響楽団所蔵)。

<sup>1)</sup> 団体名については、演奏時の名称を記載。

<sup>2)</sup> ポーランド・ラジオ放送資料には1952年9月25日の日付あり。

興味深いのは、その時期が、もっぱら一九五〇年代前半に集中していること、場所については、作曲者の母国フィンランドと作品の舞台となった日本を除けばいずれも社会主義政権下の東欧であったこと、そして、上演形態については、二つの地域でラジオ収録のみという形態が取られていたこと、である。しかも、最後の点であるラジオ収録については、世界初演の翌年という非常に早い時期に行われたものであった。シベリウスのようにすでに世界的名声を得ていた作曲家とは異なり、アールトネンのように他国では全く無名の作曲家による作品が、初演の翌年に他国でラジオ収録されるという事実は何を意味するのか。その経緯と背景を調査することにより、当時の東欧、ひいてはヨーロッパにおける音楽文化状況の一端が明らかになる可能性は大いにある。一方で、この作品が「ヒロシマ」をテーマにしていたという事実を考えれば、当時のヨーロッパにおける「ヒロシマ」受容のあり方とともに、「ヒロシマ」をテーマとする音楽作品が果たした役割について重要な示唆が得られると考えるのも良いのではないだろうか。そのためにも、これらの東欧上演の経緯と背景についてさらに調査することは、筆者にとって今後の大きな課題である。

【引用および主要参考文献】

○一次資料

- ・ Helsingin Yliopiston Musiikkiteleen Laitokselle: aineistoa säveltäjä Erkki Aaltosen toiminnasta yli kolmen vuosikymmenen ajalta. (*Erkki Aaltonen Coll. 728-35*) The National Library of Finland. (HY資料より略記)
- ・ Erkki Aaltonen Coll. 728. The National Library of Finland. (Coll. 728より略記)
- ・ "Erkki Aaltosen Sävellyskonsertti." *Suomen Sosialidemokratia*, 6/11/1949. In HY 40.
- ・ "Erkki Aaltonen Johtraa Tanään." *Uusi Päivä*, 31/3/1960. In HY 50.
- ・ アールトネン・エルツキ一九五五年八月一日「交響曲『ヒロシマ』について」『関西交響楽団 終戦一〇周年記念特別演奏会』所収、広島市公文書館所蔵(コンサート・プログラム)
- ・ Aaltonen, Erkki. 1996. *Erkki Aaltonen, HIROSHIMA Sinfonia per Grande Orchestra No. 2*. Helsinki: Finnish Music Information Centre. (自筆譜ファクシミリ版)
- 二次文献
- ・ Aaltonen, Erkki. 1966. "Erkki Aaltonen." In *Suomen Säveltäjiä*, edited by Einar Marva, 34-49. Helsinki: Werner Söderström Osakeyhtiö.
- ・ アホ・カレヴィ1997「第二次世界大戦後のフィンランドの音楽」カレヴィ・アホ、ベッカ・ヤルカネン、エルツキ・サルメン、ハーラ、ケイヨ・ヴィルタモ(大倉純一郎訳)『フィンランドの音楽』所収ヘルシンキ・オタヴァ出版: 80-179.
- ・ 福岡良明/山口誠/吉村和真編著 2012『複数の「ヒロシマ」記憶の戦後史とメディアの力学』東京: 青弓社
- ・ 「ヒロシマと音楽」委員会編2006『ヒロシマと音楽』東京: 汐文社
- ・ Karila, Tauno ed. 1965. "Aaltonen, Erkki." In *Composers of Finland*, Helsinki: Suomen Säveltäjäit.
- ・ Korhonen, Kimmo. 2000. "Composer in Profile: Erkki Aaltonen." *Music Finland*. Accessed March 28, 2014. <http://musicfinland.fi/en/>
- ・ Korhonen, Kimmo. 2003. *Inventing Finnish Music*. Helsinki: Finnish

Music Information Centre.

・ Moore, Bill. n.d. *Cold War in Sheffield: The Story of the Second World Peace Congress November, 1950*. Sheffield Trades Council Peace Subcommittee.

・ 能登原由美 2009 「アールトネンの《交響曲第二番「ヒロシマ」》 — 被爆十年後の広島公演をめぐる —」 『藝術研究』 第21・22号：87-96.

・ Notohara, Yumi. 2010. "Consolations to Hiroshima." *Finnish Music Quarterly* 3:2010. 40-42.

・ Notohara, Yumi. 2012. "Musical Expressions of 'Hiroshima' in Aaltonen's Second Symphony 'Hiroshima'." 『音楽文化教育研究紀要』 XXIV (広島大学大学院教育学研究科) 21-29.

・ Salmenhaara, Erkki. 1996. *Suomen Musiikin Historia 3 Uuden Musiikin Kynnyksellä. Provoor: Werner Söderström Osakeyhtiö.*

・ 芝田進午 (ほか) 編 1982 『反核・日本の音楽 — ノーモア・ヒロシマ音楽読本 —』 東京：汐文社

・ Wittner, Lawrence S. 1993. *One World or None: A History of the World Nuclear Disarmament Movement Through 1953*. California: Stanford University Press.

註

(1) 「ヒロシマ」の含意については、メディア史の観点による研究などにその「複数性」が指摘されるように(福岡/山口/吉村 2012)、時代やコンテキストにより様々であるが、本稿では「人類史上初めて核被害を受けた都市」としての象徴的意味合いが含まれるものを指すこととする。

(2) 筆者調べ。この数には、後述する「ヒロシマと音楽」委員会によって収集された作品データのうち、①タイトルや歌詞に「ヒロシマ」が含まれるもの、または「ヒロシマ」を暗示していることが明確であるもの、②「ヒロシマ」に関わる活動やイベントに関連して創作された作品、が含まれる。ただし、①や②に該当するものでも、具体的な

作品概要(作者名など)が確認できないものやアマチュアによる作品は含まれていない。「ヒロシマと音楽」委員会が収集した作品データの概要については、下記を参照。「ヒロシマと音楽」委員会 2006：9-11, 148-191)。

(3) 筆者もこの資料収集事業に一九九五年より関わっている。

(4) 芝田によれば、山田耕筰が一九四六年九月に原爆を主題にした舞踊音楽を作曲した記録があるが、楽譜は発見されていない(芝田 1982：171)。

(5) 「ロシヤと音楽」委員会がまとめた作品リストでは、本作の作曲年は一九四五年となっているが(「ヒロシマと音楽」委員会 2006：150)、その後、筆者の現地調査で一九四九年であることが判明した。

(6) 本稿で述べる「東欧」の定義については、東西冷戦期にワルシャワ条約機構に加盟していた社会主義政権下の地域を指す。よって、地理的には「中欧」とみなされるチェコ、ハンガリー、ポーランドも含むこととする。

(7) 一九九八年一月二十三日にフィンランドのタンペレ市で開催されたタンペレ・フィルハーモニー管弦楽団演奏会にて、メイン・プログラムとして上演。

(8) 例えば、フィンランド音楽通史として名高い叢書 *Suomen Musiikin Historia* において、アールトネンについてはシベリウスの影響下に一群の作曲家として述べられる程度である。その記述については、叢書の第三巻 (Salmenhaara 1996: 537-39) を参照のこと。

(9) 本稿における邦訳文は、邦訳された資料を引用した場合にはその旨を記すが、その他については全て能登原自身による。

(10) 遺族によれば、いずれもラジオで放送されたものをアールトネン自身が録音したものであるという。

(11) 演奏したタンペレ・フィルハーモニー管弦楽団による非公式録音。

(12) ヘルシンキ公演のプログラムについては、一九四九年の初演時、一九五四年の再演時のいずれのものについてもHY資料やColl 728には含まれていない。よって筆者は、両公演を主催したヘルシンキ・フィルハーモニー管弦楽団アーカイブに問い合わせた。その結果、一九四九年初

- 演時については同楽団にプログラムも記録も残されておらず、過去の全演奏会記録の電子データ化を進めていた楽団側さえ、四九年公演について全く把握していなかったことが判明した。したがって、四九年公演のプログラムは現在に至るまで見つかっていない。一方、四九年の公演については楽団にプログラムが残されていた。本稿で広島公演の曲目解説を比較参照したのは、この五四年公演時のプログラムである。
- (13) 一九四六年より、毎年五月中旬から六月初旬にかけて三週間わたって開かれている音楽祭。
- (14) 調査にあたり、チェコ・テレビ放送に勤める音楽学者Martin Polak氏に多大な協力をいただいた。ここに記して感謝する。
- (15) ポーランド国立放送交響楽団のアーカイブ担当者Anna Bywalec-Fojcik氏には、一九五〇年代における楽団の状況に関する詳細な説明とともに、楽団が所有する写真を快く提供していただいた。ここに記して感謝する。
- (16) 前註のBywalec-Fojcik氏に46。
- (17) 補足すれば、*Suomen Sävelkättilä*に掲載する過程でこの原稿から削除されたと思われる部分も多く、全体の構成も両者の間で多少異なるが、ここで注目する記述については、双方に異同なく書かれている。
- (18) 註15のBywalec-Fojcik氏による。
- (19) 《ヒロシマ・シンフォニー》を指揮し、数年後の再演にも影響したとみられる人物がウディチコであったという事実は、別の興味深い事実を示す。すなわち、このウディチコは、第四回ヒロシマ賞を受賞した世界的アーティスト、クシシュトフ・ウディチコ (Krzysztof Wodiczko 1943) の父親であった。こうした父親の活動が後年、息子クシシュトフの創作にどのように影響したのかは不明だが、ポーランドにおける「ヒロシマ」の捉え方の一例として、興味深い示唆を与える。バルト海に面した小国エストニアの首都。一九四〇年から九一年までソ連邦の支配下にあり、《ヒロシマ・シンフォニー》上演時は独立国家ではなかった。

本調査は、二〇一三年度キャンノン・ヨーロッパ財団特別研究員制度のもとで行われたものである。

(のとはら・ゆみ) / 「ヒロシマと音楽」委員会